

火災対応検証訓練（実行動訓練）について

1 目 的

火災が発生すると、どんな人でも一時的に頭が真っ白になり、覚えていたことは思い出せず、正常な判断力も失われるという状態になります。消防隊が到着するまでの間は「臨機応変」の判断をしなくて済むよう、想定シナリオを作成し訓練を繰り返すことが重要です。この火災対応検証訓練（実行動訓練）は、消火器や屋内消火栓等の個別の設備操作方法訓練（設備操作訓練）を行った上で実施してください。

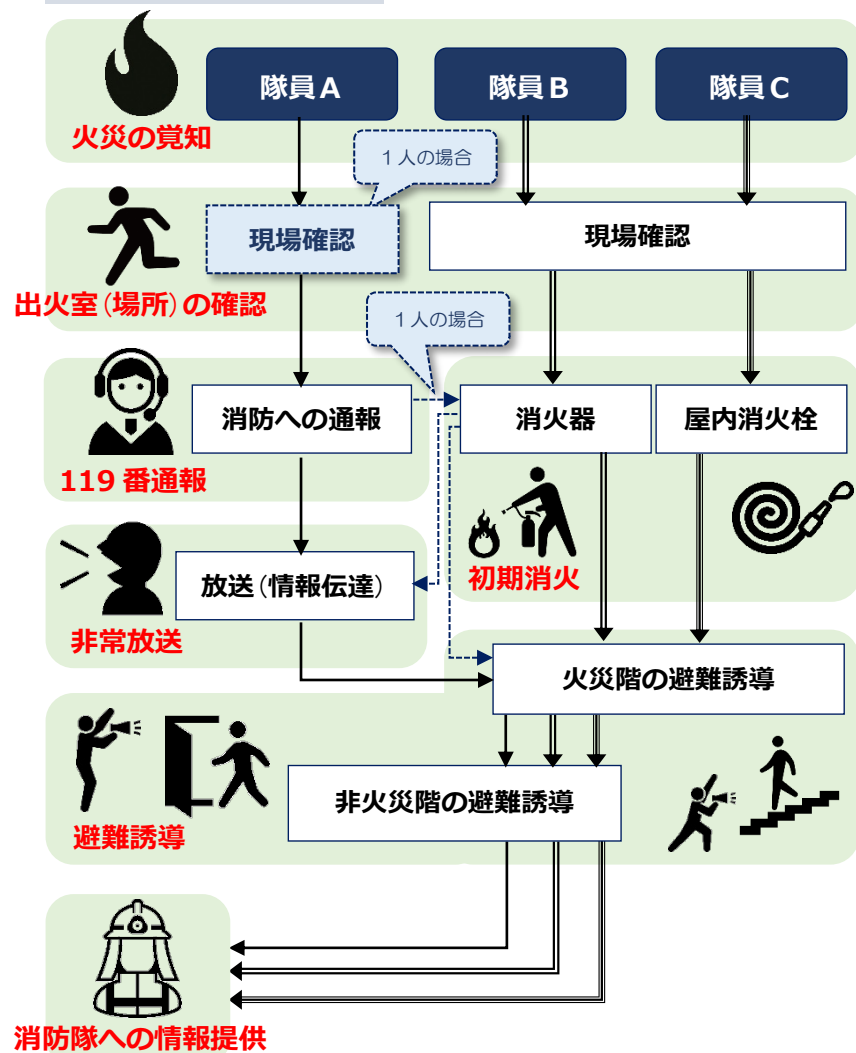
準備するもの

□ ストップウォッチ（検証者分の個数）※スマートフォンの時計アプリにあるストップウォッチ機能で可

2 訓練シナリオの作成

- 火災発生時刻の設定
（昼間、夜間といった時間帯や手薄な時間帯を想定（例：職員（従業員）が少なく仮眠中である場合等））
- 出火場所の設定
（最も発生確率の高い場所、最も発生して欲しくない場所、出火したら最も危険な状況となる場所を想定（例：避難に時間を要する位置））
- 防火区画の確認
- 扉や掃出し窓の開閉及び施錠状況の確認
- 出火時刻に応じた職員や入居者等の配置
- 避難限界時間の算定 ※資料参照

火災時の行動例



ポイント

3人以上で対応する場合は、役割分担を分かりやすく、活動の連携も比較的取りやすくなりますが、2人や1人で対応する場合は役割を兼ねることになります。また、複数で行う場合は『隊員A』がリーダー的な立場になります。

対応チェック表は、検証者が隊員1人ずつについて、行動しチェックを行います。

排煙口、排煙設備、防火・防煙区画がある場合は「現場確認」「初期消火」「避難誘導」の行動に併せて作動させます。

119番通報の要領、消火器・屋内消火栓等の各種設備の取扱いについて未習熟である場合は、各設備操作訓練として実施します。

入所・入居を伴う事業所の場合は、避難にどれだけの介添えが必要かなど具体的なケースも想定し「避難誘導」を行ってください。また、地上への避難が難しい場合を想定し『とりえず安全な場所（安全ゾーン・一時退避場所）』がどこか、あらゆる出火場所を想定した場合にその場所は安全と言えるかという検討もしてください。場所によっては時間帯、季節（気温）の考慮も必要です。避難器具がある場合は使用すること考えてください。

消防隊への情報提供は、①建物の状況（図面があると分かりやすい）、②避難の状況（逃げ遅れの有無）、③負傷者の有無・人数、④出火場所、⑤出火時の在館者（従業員・入居者等別）、⑥特異事項（危険物保有状況等）の内容が必要となります。

毎回の訓練終了後に反省会を開くなど「こうした方が良い。」「こうすべきではない。」といった意見を次のシナリオに盛り込むと効果が上がります。

3 対応チェック表

※自動火災報知設備等が設置されていない場合は、誰かが火災を発見しないと覚知ができないため、1分30秒初期の場所で待機するか、1分30秒時間を進めてください。

火災の覚知、出火室（場所）の確認（※1）	実施時間	実施者	備 考
☐ 自動火災報知設備が発報してから出火室のドアを開け火災を確認した時点まで（仮眠中の職員は15秒後に行動開始する）	分 秒		（火災階） 階
☐ 受信盤を確認したか ☐ エアコンを止めたか（煙が配管等を伝い拡散しないようにするため） ☐ 消火器、懐中電灯、マスターキー、メガホン、連絡手段ツール（PHS・自火報の送受話器等）を持参したか ☐ 声を出し、周囲に火災を知らせたか ☐ 次の行動に移る際、出火室のドアは閉めたか（火煙の拡大を遅らせるための行動を取ったか） ☐ 隊長への報告を行ったか			
119番通報	実施時間	実施者	備 考
☐ 自動火災報知設備が発報してから受話器を置いた時点まで（消防機関通報装置が設置されている場合は、ボタンを押した時点）	分 秒		
☐ 内容は的確か（消防機関通報装置を使用した場合はチェック不要）			
非常放送（※2）	実施時間	実施者	備 考
☐ 自動火災報知設備が発報してから非常放送（3回繰り返す）を終了した時点まで（自動の場合もあるがマニュアル操作に切り替える）	分 秒		
☐ 聴き取りやすく話したか ☐ 機器の操作を習熟しているか			
初期消火	実施時間	実施者	備 考
☐ 自動火災報知設備が発報してから消火器（放出体勢で15秒保持）または屋内消火栓（放出体勢で30秒保持）の操作が終了した時点まで	（消火器） 分 秒 （消火栓） 分 秒		
☐ 操作は的確か ☐ 消火器は複数用意したか ☐ 隊長への報告を行ったか			
火災階の避難誘導（※3）	実施時間	実施者	備 考
☐ 自動火災報知設備が発報してから火災階の避難誘導が終了した時点まで（当該階の最終避難口から職員が出た時点）	分 秒		
☐ 誘導の方法は的確か ☐ 逃げ遅れの確認はしたか（居室以外の無施錠の部屋を確認したか） ☐ 隊長への報告を行ったか			
非火災階の避難誘導（※4）	実施時間	実施者	備 考
☐ 自動火災報知設備が発報してから非火災階の避難誘導が終了した時点まで（当該階の最終避難口から職員が出た時点）	分 秒		
☐ 誘導の方法は的確か ☐ 逃げ遅れの確認はしたか（居室以外の無施錠の部屋を確認したか）			

※1 やむを得ずエレベーターを使用する場合は「非常用エレベーター」もしくは「停電時最寄階停止装置付エレベーター」を使用すること。ただし火災階の直下階までの使用とすること。
火災を発見後、「火事だー」と2回叫び、ドアを閉め、次の行動に移る。

※2 非常放送がない場合は「各室伝達」をする。

※3 階段室の入り口で「ここから逃げて下さい。」と2回叫び、中へ呼び込む。その後避難階まで誘導する。

「特別避難階段」があれば優先する。
「誘導音装置付き誘導灯」が設置されている場合は逃げ遅れの確認のみとして良い。

※4 スプリンクラー設備がない場合は火災階から上階全てを実施する。（火災階・直上階は1名ずつ配置し、その他上階は最上階から下りながら行う。）スプリンクラー設備が設置されている場合は火災階の直上階のみ実施する。

4 避難限界時間

【火災階の限界時間】

スプリンクラーが設置されている			9 分			
			基準	①初期消火に屋内消火栓を使用する場合	②寝具類に防災製品を使用している場合	①と②が併用されている場合
スプリンクラーが設置されていない	壁及び天井の室内に面する部分の仕上げ	不燃	5 分	6 分	6 分	7 分
		準不燃	4 分	5 分	5 分	6 分
		難燃	3 分	4 分	4 分	5 分
		上記以外	2 分	3 分	3 分	4 分

【非火災階の限界時間】

火災室を防火扉（鉄製でガラス部分が網入りガラスとなっている扉）で区画できる場合	火災階の限界時間＋3 分
火災室の扉が、防火扉ではないが不燃性の扉で区画できる場合	火災階の限界時間＋2 分
火災室に扉はあるが、可燃性の扉で区画する場合	火災階の限界時間＋1 分
火災室（火災発生場所）に区画する扉がない場合	火災階の限界時間と同じ

※訓練した結果、出火室や階段等の扉を閉鎖していなかった場合は時間をプラスして考えない。

天井が高い（3m以上）かつ空間が広い場合（200 m ² 以上）	さらに 1 分追加
---	-----------

★訓練に立ち会う防災業者に確認する事項

- ☐ 自動火災報知設備の発信機が、屋内消火栓のポンプ起動と連動している場合は連動停止にする。
- ☐ 自動火災報知設備の感知器を発報させることで、防排煙設備と連動している場合は連動停止にする。
- ☐ “ ” エレベーターが制御される場合は連動停止にする。
- ☐ “ ” 放送設備が自動で鳴動する場合は連動停止にし、手動で放送ができるようにする。
- ☐ 訓練終了後の消防設備の完全復旧。

★訓練参加者に事前に統一しておくルール

- ☐ 怪我のないよう落ち着いて訓練を実施する。
- ☐ 防災指令センターに事前連絡を行った場合を除き、119番通報・火災通報装置は模擬で行う。
- ☐ 「初期消火」の測定項目内にある、消火器・屋内消火栓の放出体制が取れた時点で、消火器は“15秒”消火栓は“30秒”を声を出して訓練検証者に聞こえるように数える。
- ☐ 屋内消火栓を使用する場合は、ホースを延ばし、ポンプを起動するボタンは押す*こととするが、水を流すバルブは回さない。*ポンプ起動ボタンが自動火災報知設備の発信機を兼ねている場合に注意すること。
- ☐ 放送設備は連動停止にしてあるため、手動操作で放送を行う。

～MEMO～

※ 動画の資料も参考にしてください

火災対応検証訓練(実行動訓練)について



検証者用
解説編



進め方編